法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

<文献紹介>法政大学地理学会編集『法政大学地理学会　創立70周年記念論文集』

YAMAGUCHI, Takako / 山口, 隆子

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
54
(開始ページ / Start Page)
77
(終了ページ / End Page)
80
(発行年 / Year)
2022-03-20

【文献紹介】

法政大学地理学会編集（2021年2月発刊）
『法政大学地理学会 創立70周年記念論文集』
法政大学地理学会，B5版・ハードカバー，311ｐ

法政大学地理学会（以下，当学会とする）は創立70周年の節目に記念事業を企画し，その一環として有志による論文集（以下，本誌とする）を発刊した．本誌の刊行には，相原正義編集長の強いリーダーシップのもと5名の編集委員が3年間にわたり検討・校正等の編集作業を行なったと仄聞しており，その結果，当学会ではこれまでに類をみない論文集が出来上がった．以下，内容について紹介する．

当学会の70周年までの経緯については，本誌の最初に相原編集委員長が詳細に記述している．特に，法政大学の創立から地理学科創設までの経緯，更に戦争の混乱期を経て当学会が設立されたことは，多くの文献を引用して解説し，更に，地理学科関係でこれまで勤務した教員に関する説明は，綿密な調査により述べられている．特筆すべきは，当学会創設から現在までの経緯で，すべて順調に進展したわけではなく，13年間の活動の中断や学会運営の大変な苦労があり，5年前に当大学に赴任した評者には初めて知る事実で，当時の苦労がしのばれる．なお，巻末に掲載されている「法政大学地理学会　活動の記録」の年表と併せて見ると大変良く理解できる．

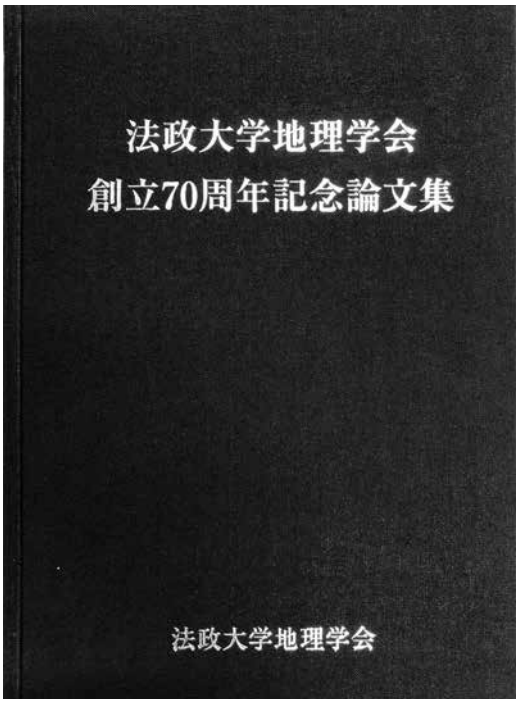
次に本誌に掲載されている26編の論文（総論1編，地図4編，地形1編，気候9編，水・生物4編，文化・教育5編，経済1編，応用・環境1編）について，かなり冗長になり紙幅を割くことになるが，概要を紹介する（掲載順，カッコ内は著者）．

・自治体史編さんにおける地理学の役割と可能性（浜田弘明）

全国の49の自治体史における地理編を分析し，地域研究による地理学的手法の有効性を検証している．また，筆者が参画した相模原市の自治体史を検討し，地理学的な視点による市民に分かりやすい自治体史について論考がまとめられている．その結果，地図や写真類は地域資料として位置付けることが重要であると述べている．

・最初の広域迅速測図（清水靖夫）

日本における地図の作成で重要な迅速測図について，地図研究の第一人者である筆者が詳細に説明している．特に，明治政府の軍部による作成の経緯は綿密な調査に基づいて記述されている．更に，迅速測図の作成手法についても興味深く解説しており，本稿は地図の歴史を知る上では重要である．



・地籍図にみる溜池水利の復原とその課題――大阪府羽曳野市西川地区を事例として――（川内眷三）

溜池の集水・貯水・灌漑・排水などの利用について，大阪府羽曳野市西川地区を対象にした調査結果をまとめている．特に，対象地区のため池の変遷は，明治時代からの地籍図を用い，更に地域住民との関わりまで考察し，詳細に分析している．ため池の水利研究の際に参考になる．

・戦前期東京都における史蹟の分布とその特徴――『東京都史蹟名勝天然紀念物　旧市域内』（1943）の分析――（米家志乃布）

江戸から引き継いだ東京の史蹟について，旧東京市における分布と各史蹟の内容について詳細に調べている．特に，「史蹟名勝天然紀念物」の本指定・仮指定等の分布は図に詳細に描かれている．また，各史蹟の歴史的背景は多くの文献を引用して考察しており，その結果，東京における史蹟は江戸における「寺社地」に分布していることを明らかにした．

・主題図であって主題図とは呼べない主題図（中俣均）

学生が地理学を学ぶための「主題図」を素材として取り上げて解説している．具体例として，桜の開花予想図は多くの要因によって成り立っていることから地理学的な本来の主題図であり，菓子メーカーの地域的特色図は説明図として分類している．現在，地図的表現は多く見られるため，主題図と説明図を区別することを提案している．

・円錐カルスト地形研究の概要と今後の課題（羽田麻美）

世界における円錐カルストについて，多くの研究を引用して専門外でも分かりやすく説明している．更に，石垣島と宮古島の研究例が少ないため現地調査を行ない，その特徴を把握し，両者の相違を解説している．加えて，琉球列島における石灰岩地域における研究課題を提示している．

・日本における歴史気候学の研究動向と課題（平野淳平）

古気候観測資料を基にした歴史気候学について説明しており，内容は教科書的であり参考になる．さらに今後の課題も多数提示しており，これからの研究に役立つ．この分野は現在，研究が進んでおり，日本気象学会第 9 回気象学史研究会「モンスーンアジアの気象データレスキュー」においても紹介されている．

・北上低地における屋敷林から推定した卓越風向（漆原和子・高瀬伸悟・髙花達也）

北上低地の屋敷林と風向に関する研究をレビューしたのち，南側に設置した防風林について現地調査により考察している．特に，4 地区 22 か所おいて実施した樹木の毎木調査は，屋敷林を理解するうえでかなり参考になる．屋敷林の調査により，北上低地においては，寒候期は季節風による北西風ではない，南風の存在を解明している．

・東京都下における視程の経年変化と目標物可視条件に関する考察（狩野真規）

東京都武蔵野市吉祥寺における 3 点の目標物に対する視程の観測記録を用いて，経年変化や視認条件を調べ，貴重なデータを提供している．50 年以上にわたる観測結果を大気汚染物質や気圧配置，気象条件などから詳細に考察して，長期変化傾向の原因を解明している．東京における近年の大気汚染の状況を明らかにしている．

・東日本大震災被災後の気温分布と被災当日の降雪エリアの特定 ── 複合災害の視点を含めて ──（千葉晃）

東日本大震災時の複合災害の一因となった低温と降雪について，調査している．地域的な最低気温の解明は筆者の得意とする分野で，詳細に解析している．また，降雪については，YouTube を用いた新たな研究手法で検証している．震災から 10 年目となった本年にはタイムリーな内容である．

・東京首都圏における北西方向への気温の縦断分布とその季節的変化（中村有沙）

都心から川越市までの気温の地域性を解明するため，既存の観測施設以外に小学校の百葉箱を用いた定点観測，川越市での移動観測を実施し，詳細に調査している．その結果，季節，天気，風による相違を捉え，更に海風前線による影響を考察している．また，アメダスから対象地域の気温を精度良く算出している．

・近年の日本上空における水蒸気量の経年変化（加藤美雄・塩谷恭正）

地球温暖化に伴う対流圏の水蒸気量が調査されていないため，南北 7 地点の高層観測地点における 30 年間の経年変化を調査した．水蒸気量は南高北低，エルニーニョ現象の影響があり，更に，大気の境界層付近で増加がみられた．結果には多くの課題があるが，今後の地球温暖化による対流圏の研究に一石を投じる内容である．

・WebGIS を活用した関東地方における大雪事例（中山秀晃）

関東地方に重大な影響を与える降雪について，WebGIS を用いて解析した研究である．シチズンサイエンスによる多くのデータを分析しているため，これまでの経験則とは異なる低気圧の経路と降雪分布が解明された．また，下層寒気の動向と降雪域の拡大では，気象学的に考察し，地域的に詳細な結果が得られている．なお，筆者は本研究の内容に関連し，日本気象学会 2019 年度小倉賞を受賞している．

・NZ 南島におけるフェーンの発現とその気温分布特性（佐藤典人）

日本と類似している NZ におけるフェーン現象について，南島の西風と東風の相反する風向による気温分布により詳細に解明している．特に，東西両地点の昇温量の相違を季節や気圧配置により考察し，更にはショルダー効果などの気象学的な説明は興味深い．また，論文の構成や作図，解析手法は分かりやすく，参考になる．

・局地風「生保内だし」（秋田）に関する気候学的考察（永保敏伸・二関和彰・佐藤典人）

これまで研究としてあまり取り上げられていない「生保内だし」について，その現象を把握し，気圧配置を特定した．更に，大気の鉛直断面から逆転層の影響を見いだし，長期間継続するのはオホーツク海高気圧によるものと結論付けている．また，国内外における局地風のレビューは，現象と成因を分かりやすく説明している．

・利根川洪水記録にみる江戸・明治・昭和の大水害 ── 洪水・災害記録資料の研究法についての考察 ── （松尾　宏）

江戸時代以降の関東地方の洪水による治水システムの要となった中条堤の変遷について，記録資料や聞き取り調査により考察している．水害の状況と中条堤の役割については，貴重な写真や地図，及び文献により論考をまとめている．今後の河川の防災対策を検討するうえでも重要な研究である．

・多摩川水系・湯殿川における流域開発と降雨流出（吉岡耀子）

土地開発と洪水に着目し，長期間にわたって都市化が流域に及ぼす影響を調査している．特に流量や流域面積などの数値化とその図表は，客観的な根拠に基づく解析である．調査期間中に都市開発が進行した対象地域において，流出率が増加し流出までの時間が短縮した等の結果は，注目に値する．

・武蔵野台地中央部・黒目川流域の水文環境（角田清美）

武蔵野台地は火山灰（関東ローム層）の堆積により湧水池は少ないが，黒目川流域には多く存在しているため，その発生機構について解明している．本稿は筆者による多くの研究と過去の論文の調査結果を用いて，豊富な図と解説により分かりやすく説明している．特に武蔵野台地の形成史は詳細に記述している．

・広義のヒマラヤ山塊における植生と景観の分布帯について（細田　浩）

筆者の現地調査に基づくヒマラヤ山塊の植生と景観に関する集大成で，貴重な報告である．特に，4地域における各山塊の高度と気候条件による植生が如実に描かれている．本稿は，本誌で唯一，植生に関する報文であり，まとめとしてトロールと比較した現地の植生分布と気候の差異を考察し，新たな知見が得られている．

・中学生と考える身近な「領土問題」（武田竜一）

勤務校における身近な問題として東京湾中央防波堤の帰属をめぐる論争をテーマにした授業内容を報告している．授業では日本の領土問題から該当地の新聞記事やビデオによる論争を紹介し，グループ討議で解決策を協働で模索させている．筆者が実践しているシティズンシップ教育に関する論文である．

・東京のムスリムに関する諸問題（長沢利明）

外国人の急激な増加に伴い，異文化共存と相互理解に関する重要な課題について，ムスリムを例に検討した．日本と大きく異なる宗教習慣及び生活習慣である衣服と食生活について，具体的に説明している．このような事実は日本の国際化を進めるうえで理解しておく必要があり，本稿は重要な示唆を与えている．

・島嶼の地理学的研究の動向 ── 卒業論文・修士論文・博士論文に注目して ──（前畑明美）

本誌の刊行に相応しい，地理学科創設からの卒業論文等を対象に，島に関する154編の研究すべてについて究明している．特に，島の研究の背景や時代ごとにおける研究動向の変遷について，詳細に考察している．島の普遍的な価値を解明する「島嶼性」を見いだす研究であるとともに，今後の「島嶼地理学」における課題を提起している．

・福島第一原発事故後の学校移転から避難指示解除後の学校づくりに関する研究 ── 双葉郡浪江町の小中学校を中心に ──（吉本健一）

福島第一原発事故後の避難地域における小中学校の教育状況について，現地調査により現状を把握し，問題点と課題を考察している．3年間に及ぶ聞き取り調査などにより，原発事故直後からの教育活動の状況を詳細に分析し，説述している．原発被災地における教育現場の実情と教員の苦悩が如実に伝わってくる．

・戦後地理教育論による手賀沼授業の検討（相原正義）

筆者の貴重な経験による戦後教育の実態から身近な地域の題材として手賀沼を紹介している．特に，筆者が実践していた現地での学習，及び自然と地誌を考慮した授業が詳細に述べられている．2022年度からの高校における「地理総合」の必修に伴い，教員による授業の工夫が必要であり，本稿は参考になる．

・東日本大震災による気仙地域水産加工業の被災と復旧（柳井雅也）

東日本大震災により大きな被害を受けた大船渡市と気仙沼市の水産加工業について，聞き取り調査により現状を把握した．調査は，両市役所と企業10社を面接により詳細に行なっている．その結果，大船渡市は水産業から食料品への取引額は減少し，気仙沼市は全く逆となり，背景には企業規模や取引魚種，外国人労働者などが関わっていた．

・アラル海流域における灌漑開発と環境問題に関する地理学的研究 ── ウズベキスタンを中心として ──（中村圭三）

半世紀で10分の1まで干上がり，20世紀最大の環境問題と言われたアラル海の水位低下を報告している．アラル海の縮小の状況，及び環境悪化については，現地調査と文献により説明し，また，塩害問題の対策も提案している．アラル海の問題は，利益を追求した結果，長期的な負の遺産を背負うことになり，この事実は環境教育には参考になる．

全ての論文の後に掲載している執筆者一覧には主な著書や論文があり，内容と併せて参考になる．また，執筆者の現職も掲載してあるので論文についての問い合わせも可能である．なお，各執筆者の体裁について

一部，不統一な箇所があるのは気になるところだが，これは本誌の内容に影響を及ぼすものではない．

本誌は前述のように内容もさることながら，表紙はハードカバーの布張り，色は濃紺に金文字，更にケース，栞ひも付きで大変素晴らしい装丁になっている．また，用紙は上質紙を使用し，カラーも多く図表は鮮明で分かりやすく配置されている．

以上，本誌を概観したが，内容は地理学に関係する最新の論文を掲載し，極めて示唆に富んでいる．また，著名な執筆者が該博な知識で踏み込んだ解説をしている論文もあり，大変参考になる．巻頭言で細田浩会長が「本誌には自然地理学系，人文地理学系，両者に亘ったものなど様々な分野の研究が共存しており，地理学という分野の強みが感じられる」（要約）と述べているように，本誌は大変有意義な書籍である．評者も，講義の際の参考資料に提示させていただきたいと思う論文が多数あった．学生，教員，卒業生など全ての会員は，常に傍におき参考書籍の一冊に加えていただければと思う．

（山口隆子）